opusdei.org

## 黙想の祈り:年間第 15主日(B年)

黙想のテーマ:「キリスト者の生き方」「神の賜の無限の価値」「使徒職は愛徳の溢れ出

キリスト者の生き方

神の賜の無限の価値

使徒職は愛徳の溢れ出

「わたしは預言者ではない。預言者 の弟子でもない」(アモス7·14)。 ミサの第一朗読で読まれた、ベアル 王国の神殿の祭司がイスラきの神殿の祭司がイたときの説得しない。 記教しなでする。アジクスを表すしない。 家畜を飼い人だと説明と活いるを まる、のの使いがするといるがする。 なのではないができれたからと考えのではない。 知恵者のではない。 知恵者のではない。 知恵者のではない。 知恵ないなりません。

も、外的なことだけでもありませ ん。それは「キリスト信者の呼吸と 言えるでしょう。神の子であれば、 この霊的鼓動なしに生きることはで きません」「」。オプス・デイの属人 区長の指摘のように「使徒職をする のではありません。私たちは使徒な のです」
[2]。私たちは使徒です。主 が、全ての受洗者に、生活の中心に するようにと託された務めだからで す。聖ホセマリアはオプス・デイの 信者にこう言っていました。「わが 子よ、私たちは何か善いことをする ために人々と一緒になったのではな いことを忘れないように。それはす こぶる立派なことだ…、しかし僅か なものだ。私たちはキリストの至上 命令を果たす使徒なのだから | 図。

第二朗読で読まれるのは、聖パウロがエフェソの信者あての手紙にしたためた賛歌です。父なる神に向けられた祝福の祈りを取り上げています。キリスト信者の聖性への召し出

しを考察し、神の救いの計画を話 し、そして最後には、「天にあるも のも地にあるものもキリストのもと に一つにまとめられる| (エフェソ 1・10) と要約しています。主は、私 たちに神との親子関係の賜を与え、 この全人類救済の計画に協力するよ う招かれました。「社会の中にあっ て、神の子となる召命を受けた私た ちが、自己の聖化だけを追求するだ けでは充分ではありません。地上の 小道を巡って、障碍をうち破り、そ の小道を神への近道に変えねばなり ません。この世のどのような活動に も人々と一緒に参加し、パン種と なって粉全体をふくらませなければ ならないのです | [4]。

「12人を呼び寄せ、遣わすことにされた」(マルコ $6\cdot7$ )。この時まで、使徒たちは、他の弟子たちと共

に、イエスに同伴して村々を巡りまたの教えに耳を傾けていた宣教には、主の名に主の名に主の名に主の名に主いいて宣すとといいを適とない出しがある。は、はいいは、はいいないでもない。でもおらないのは、は、望何うがたは、はいいないは、使徒の生活を特徴にない。の生活を特徴にない。は、では、さいの生活を特徴にない。の生活を特徴にない。の生活を特徴にない。の生活を特徴にない。の生活を特徴にない。この生活を特徴にない。この生活を特徴にないます。

「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金もも、だ履物は履くように、なず、下着は二枚着てはならをもった。「下着は二枚着ではならをもりとなった。 イエスは弟子たちに、福音を宣えない。 イエスは弟子たちに、福音をある望れる時には彼らが神の道具である望まりと理解しているよう望まれたのです。それゆえ、宣教の実時らし、人間的な手段や資質、素晴らし

く綿密に計画された作戦などによっ てもたらされるのではありません。 とはいえ、これらのことが、使命遂 行に役立つことは間違いありませ ん。しかしまた、人を無気力にした り、神のご計画に反旗を翻したりす る障害にもなり得ます。いつも、私 たちの卑小さと神の偉大さを考える ことです。それは、私たちを豊かに した事柄で賜の無限の価値が輝くよ うにするため、また、最初に考えが ちな、物的な善、権力、名声、喜び などには、相対的な重要性があるだ けであることを明確にするためで す。

主の御助けで、広範で奥深い使徒職を志す人は、清貧、節制、慎ましさ、単純さ…を心から愛するでしょう。これらの諸徳がその生活に現れてこそ、本物の使徒であると言えます。このような生活は、多くの人りまず。なぜなら、キリストを中心に生

活しようと努める人の喜びを伝えるの書でを伝えるのです。「福音宣教仰のです。「福音信仰のには、単に他のなりには、単になる人にならにはなられたないのはなりになった。とばないのように関わるして、とばないのようにははばして、りません。のですしていくのです」 [5]。

イエスは、使徒たちを「二人ずつ組みにして」(マルコ6・7)お遣わしになります。こうして、大聖グレゴリオが強調するように、使徒職と愛徳の関わりを示そうと望まれたのです。「愛徳の掟には二つあります。神への愛と隣人への愛です。主が弟子たちを二人ずつ宣教に送り出され

たのは、何も言われてないとして も、他者に持つべき愛徳のない人 は、決して、宣教の役務については ならないことを私たちに教えるため ですして、同じことを聖ホセマリア も教えました。「キリスト信者がこ の世で実行すべき第一の使徒職、つ まり、最も効果的な信仰のあかし は、真実の愛が教会を支配するよう 力を貸すことです。互いに心から愛 し合わなければ、そして、攻撃、中 傷、いさかいを無くさなければ、 『福音』を告げようといくら苦労を 重ねても、人々をひきつけることな どできるはずもありません」
「フ」。
使 徒職は、最も近しい人から始めて、 人生で出会う全ての人々に対する満 ち溢れる愛徳から生まれる以外の、 何ものでもありません。ですから、 一般信徒の使徒職は家庭から始まり ます。例えば、夫婦間での細やかな 相互愛です。夫婦の一致と献身のあ かしは、子供たちに信仰を伝えるた めに、神がお使いになる重要な手段 です。また、職場や社会生活、地域 共同体の種々の分野、スポーツや他 の休暇の時期…における他者への配 慮や奉仕も使徒職です。

愛徳を礎にすると、家庭と同じよう に他の環境においても、自然に多く の人たちとの友情が芽生え、育って いきます。そうすると、願っている 全てのことに対して私たちが持って いる希望の理由を、いつも穏やか に、敬意をもって語ることが出来る ようになるでしょう (一ペトロ3・ 15-16参照)。この毛管現象のよう な使徒職の実りが広範に及ぶことを 夢見つつ、聖ホセマリアがしたため ました:「共に働いているカトリッ ク信者間の、疑い深さや敵対心が無 くなるのに貢献することになりま す。産業界や商業界をキリスト教の 精神で包み、イエス・キリストと教 会を守り、仕えるため、現代思想を 統率する一助になるでしょう。キリ スト・イエスにおいて一つになって

いる人たちを分裂させ得る民族、言 語、習慣などの違いは妨げではない ことを、カトリック信者に理解させ るよう努めましょう。細やかな愛徳 をもって、全ての人たちと付き合 い、一定められた秩序内で一家系や 信条の差別なしに、私たちのキリス ト信者としての光と暖かさで、彼ら を主なる神に近づかせる、こうして 私たちは、国際的な関わりにおいて 平穏で誠実、寛容な雰囲気を作り出 すことに協力できるでしょう。そし て政治家たちの思考や生活において 聖霊の働きが容易になり、国々に平 和が訪れ、住みよい世界になるで しょうしょ。私たちの日常生活が、 熱烈な愛徳に満ちたものになり、多 くの人たちに信仰の光と暖かさを伝 えることが出来るよう、聖マリアに

お願いしましょう。

- <u>[1]</u> 聖ホセマリア『知識の香』122 番。
- [2] フェルナンド・オカリス、2017 年2月14日司牧書簡9番。
- [3] 聖ホセマリア、1934年3月19日指 針27番。
- [4] 聖ホセマリア『知識の香』120 番。
- [5] フランシスコ、一般謁見演説、 2023年3月22日。
- [<u>6</u>] 大聖グレゴリオ、福音についての説教 17。
- [7] 聖ホセマリア『神の朋友』226 番。
- [8] 聖ホセマリア、1935年5月/1950年9月14日指針96,1。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-nenkann-15shujitu-b/(2025/12/16)